常光寺々報

2019. 春

春彼岸会法要

三月十七日(日)

昼一時半～四時

『人間というもの』

調布市・覚證寺住職

講師　細川　真彦　先生

三月十八日(月)昼一時半～

当山　住職

光輪法座　三月三日(日)一時半～

法話　住職

やすらぎ法座　四月二三日(火)十時～

講話　副住職

永代経法要

五月十二日(日)朝・昼

講師　勧学寮頭　徳永道雄先生

講師紹介

ご講師の細川真彦先生には、本堂の工事中に、一度ご出講をいただいております。

天狗のように、一本歯の高下駄を履いて境内を掃除されているというイケメンの先生です。通学児童にも大変人気だそうです。

また、本堂の裏の墓地には「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な水木しげるさんのお墓もあるお寺です。せっかくのご縁ですから、細川先生のお話をお聞きください。

愚者になりて

親鸞聖人はご消息に、「愚者になりて往生す」と言われているが、愚者とはどんな意味だろうか。

学生時代に教わった村上速水先生は定年直前に脳血栓で倒れられ、しかも、その翌年には奥様まで脳卒中で倒れられた。その頃の闘病生活を記された『病いに生かされて』には、「人間は、いつどうなるかも知れぬ身であると、自分の経験を通して知りながら、まさかそれが自分の妻になるとは知らなかった。明日のことは誰もわからぬと知りながら、私だけはそうではないと思っている。愚かなことである」と言われている。

先生がここに言われる「愚かさ」こそ「愚者になりて」の愚なのであろう。

還相回向

大峯先生が亡くなられて、早や一年になりますが、今、先生の法話集を読んでいると、先生のあの頃の口調がそのままに聞こえてきそうです。以下、先生の法話集から少し抜粋してみます。――

わたしは今も本を書いたら西谷先

生のお嬢さんに届けます。そうしたら先生のことを書いたページを開けて、お仏壇に供えてくださるそうです。ときには句集を送ることがありますが、そちらの方は、読んだ後、誰かに差し上げて回し読みをしているとのことでした。西谷先生は、そうやって私の書いたものを今もご覧になってくださっているのです。これは仏さまだからちゃんとわかってくださるのです。亡くなった人は、どこかに消えるのではありません。

人が死んだら消えてなくなってしまうというのは、現代人の大きな妄想ではないかと私は思います。人はいなくなるということはないのです。現代人が持っている根本的な一般的感覚は、人間は死んだら無くなると思っていることです。これは、仏教徒でも、キリスト教徒でも変わりません。無になるかどうかは、死んでみないとわからないことでしょう。私という存在が、死んだら消えてしまうというのは、まだ死んだことのない私にはわからないのです。もちろん、私もどうなるのかをはっきり知っているわけではありませんが、無くならないとおっしゃっている仏さまの言葉を信じているだけです。

☼　☼　☼　☼

死んだら無だというのは現代人の共同幻想で、みんながそう言っているからそうなのだというだけでしょうね。誰もが、本当は知らないことを知ったつもりになっているということです。わからないことを正直にわからないと言えないうちは、真理に出会うことはありません。この一点をごまかしているかぎり、本当に仏法を聞くことはできないのです。

死んだら無になるという主張は、現代人がついている最大の嘘です。もちろんこの嘘は、自分が貧乏なのに金持ちだと言ったりするのとは質が違います。だから現代人の多くは、たいていやさしい顔をしたまじめな大嘘つきなのでしょう。

私たちは、如来さまに自分が助けられるということを知らなければならないのです。助けてくださるらしいというのは信心とは申せません。みんながそう言っているから助かるわけでもありません。信心とは、自己意識よりももっと深い仕方での自覚だと思います。如来さまの方から知らされることです。信心は智慧だと親鸞聖人はおっしゃっています。本当の智慧を与えられたことが、如来さまに助けていただいたことなのです。